



No. 43

平成30年3月12日
発行 多治見市教育研究所

URL

<http://school.city.tajimi.lg.jp/kyoiku/>
本誌は、多治見市教育研究所ホームページ上でもご覧いただけます。

巻頭言 今つきたい力を

多治見市立多治見中学校 丸山 近

2002年8月、サッカーの中学生年代の東海地区選抜チームを連れてオランダに遠征に出かけた時のことです。国際大会に参加できるということで子ども達も指導者も大変楽しみにしていました。日本の大会ならよくやっても一日2試合、30分ハーフでというのが常識なのですが、その大会は15分ハーフで4試合でした。大会主催者にその趣旨を尋ねると、「この中学生の頃は、同じ相手と長く対戦することよりも、いろいろなタイプの選手やチームと対戦することが大事で、短い時間の中でも点を取るというサッカーでいちばん大切なことを学んでほしいから」ということでした。

翌日、クラブチームと試合をするために会場を訪れると、サッカーコート1面に100人くらいの小学生が集まって、1コートに5面の小コートを作って4対4の試合をしていました。普通なら1コートで22人しかゲームができませんが、これなら、一度に40人が参加できることになります。しかも、審判は自分たちでやっていました。勝てば勝ち点3、引き分ければ勝ち点1、1点入れれば1点とゲームも工夫されていました。これも、小学校のこの時期には、沢山ボールに触ることが大切で、常に判断して動いていなければいけないような状況の中に置くことや、点を取ることの大切さを学んでほしいし、自分たちで審判をすることで、公平さや審判への敬意も学んでほしいという考えからでした。22人の人数で正規のコート1面では学ぶべきものが少ないというのです。

また、翌年のオランダ・ベルギーへの遠征では、大雨で国際大会が中止となってしまいました。遠く外国から何チームも参加しているのに平気で大会を中止してしまうのです。日本ではサッカーは雷で中断することはあっても、雨で中止するような事は考えられません。それも主催者は、「この雨では子ども達が良いパフォーマンスを発揮できないし、怪我があってはいけません」ということでした。

それまでの私の中では、サッカーのコートの広さや時間、人数は決まっているもので、それを大会で崩すということは考えられませんでした。

オランダでは、施設的な環境もそうですが、「今、この時期につきたい力は何なのか」「そのためにどんな手立てを工夫するのか」が明確にされていることに感心しました。

私たち教師も、何をやるのかは勿論大切ですが、何の力をつけなければいけないのか、そのためにどんな工夫をするのかを明確にもった教科指導や生徒指導をしたいものです。



平成29年度 研究報告会

平成30年2月20日に、平成29年度研究報告会を開催しました。多治見市内の先生方が執筆した教育実践論文の中で、最優秀賞を受賞された養正小学校の榎岡智恵教諭、陶都中学校の養梨絵教諭、優良賞を受賞された精華小学校附属愛児幼稚園の古田博子教諭に実践を発表していただきました。また、研修視察のまとめとして、南ヶ丘中学校の深萱健次教諭に発表していただきました。優れた実践から学ぶことができる貴重な機会となりました。

今年度の教育実践論文には、新人の部26点、一般の部18点、合計44点の応募をいただきました。校種別では、幼稚園3点、小学校17点、中学校24点でした。

応募された実践論文からは、子どもの成長を願って日々実践を積み重ねてみえる先生方の様子が伝わってきました。

審査の結果、小中学校の最優秀賞及び優秀賞、幼稚園の優良賞に選ばれた作品の概要を以下に掲載します。全文は各学校に回覧されたり、論文抄が発行されたりした際にご覧ください。

【最優秀賞】

＜美術科＞ 表現する喜びを味わい、発想豊かに美を求め続ける生徒の育成
多治見市立陶都中学校 養 梨絵

作品を生み出す最初の場面であるアイデアスケッチにおいて、得意な生徒と不得意な生徒とで大きな差が見られる。差とは、「思いつく**アイデアの数**や**制作のスピード**、**試行錯誤の力**」である。自分らしいアイデアが考えられるかどうかは、作品の質だけでなく、生み出す過程での満足度にも影響すると考える。

私は「発想・構想の能力」に重点を置いた。そこでアイデアを**発想していく手順**を示し、本当によいアイデアであるかどうかを見直し、試行錯誤できるように**洗練の視点**を与える。そして仲間と共に作品をよりよいものにしていくことができるよう、**交流を活発**に行う。そうすることによって、表現する喜びを味わいながら豊かに発想し、**よりよいものをつくりだそうとする意欲**をもつことができると考え、実践を行った。

キーワード：**発想の数、制作のスピード、試行錯誤の力、発想の手順、アイデアの洗練、交流、よりよいものを求める**

＜理科＞ 疑問を解決する楽しさ、理科の有用性を実感できる理科学習
多治見市立養正小学校 榎岡 智恵

理科の今日的課題として、中学生はあまり理科の有用性を実感していないということが挙げられている。この課題を解決するためにも、小学校の段階で理科の本当の楽しさを味わわせたいと考えた。今年度担当した4年生は、「実験」は好きだが、目的意識のある探究活動になっていないこと、予想・結果・考察のそれぞれの場面で、多くの児童が自分の考えをもてていないことが明らかとなった。そこで、児童が自然の事物・現象に関わる時に理科の見方・考え方を働かせ、学習過程の中で一人一人が自分の考えをもてるようになれば、疑問を解決する楽しさ、理科の有用性を実感できると考え、実践を行った。

研究内容(1)では、**理科の見方・考え方を働かせる単元を構想**したことで、児童は身に付けた理科の見方・考え方を働かせて、自然の事物・事象について考えられるようになった。研究内容(2)では、それぞれの探究の過程で指導を工夫したことで、児童一人一人が自分の考えをもって学習活動に臨めるようになった。これにより、児童は**疑問を解決する楽しさ、理科の有用性を実感**することができた。

【優秀賞】

＜特別支援＞ 他者と関わるよさを味わうことのできる子の育成
 ～積極的に関わり合う中で自己有用感を高めるための手立てを通して～
 多治見市立小泉中学校 井藤 宏文

生徒 A は非社会的で、交流学級の生徒と関わろうとしていなかった。また、QU アンケートの結果から、自己有用感が低く、限られた人間関係の中で生活している様子が分かった。そのため、生徒 A は社会の中で人と関わり、認められた経験が少ないため、**自己有用感**が育まれておらず、よって、**社会性**を獲得できていないのではないかと考え、他者と関わるよさを味わわせることを目指した。

具体的な方策として、**積極的に活動させるための手立て**を用意した結果、生徒 A が自分から活動に取り組む姿や、交流学級の生徒と関わろうとする姿が生まれた。また、**関わり合う中で自己有用感を育む**ことができる場を設定した結果、生徒 A が年長者としての自信を付けたり、交流学級の一員として役立ちたいと願ったりする姿が生まれた。QU の結果も大きく改善し、12月に行った QU では、生徒 A の**自己有用感**や**他者と積極的に関わろうとする態度**が育まれていることが分かった。本論文は、その実践を生徒の姿を通して検証したものである。

＜体育科＞ 仲間と共に運動を楽しみながら、できる喜びを味わう体育授業をめざして
 ～フラッグフットボールの実践を通して～
 多治見市立市之倉小学校 八橋 諒

体育科の学習を通して、生涯にわたって運動に親しむ資質、急速な社会の変化に適応するために、外界との相互作用から学ぶ資質を育みたい。そのために、**できる喜び**を味わわせるとともに、**対話的活動**を通して、仲間との関わりから学ぶことよさを実感させたい。研究テーマを「仲間と共に運動を楽しみながら、**できる喜び**を味わう体育授業を目指して」とした。そこで、本実践では、ボール操作が易しく攻守分離型であり、仲間とともに動きを試行錯誤しながら活動できる「フラッグフットボール」を扱った。研究内容は次の2点である。

I 単元指導計画の工夫 II 単位時間の工夫

本実践で、児童の実態に合わせて**教材教具、場の設定**を工夫した。また、仲間とともに**視覚教材**を活用して、試行錯誤しながら作戦を練り、実行する活動を仕組んだ。そして、児童自身、教師による**評価**を工夫した。それにより、仲間と考えを積極的に伝え合い高め合う児童、運動の楽しさや**できる喜び**を実感する児童が増えてきたことは大きな成果と言えるだろう。

＜算数科＞ 「なぜそうなるのか」を考え、仲間とともに「高め合う」ことが楽しい算数科学習
 ～「3つのかずのけいさん」「ひきざん」の学習を通して～
 多治見市立精華小学校 小栗 綾夏

平成 30 年度から施行される学習指導要領では、今まで「算数的活動」という言葉が使われていたところが「数学的活動」に変更されている。算数から数学へ抵抗なく学習を進められるようにするためである。算数は具体的な事象を取り扱い、より日常生活に近くイメージしやすい、実用的な演算等を勉強する。数学は、算数で身に付けた技能を使って、目に見えにくい抽象的なことを一般化するなど、「答えを出す」ことよりもその「プロセス」を大事にした勉強をする。したがって、算数の勉強の段階で「答えを出す」ことを重要視し、そこに楽しさを感じている子どもは、数学の勉強になるとつまずいてしまう。算数から数学の学習へ円滑に進められるようにするためには、算数の勉強をする**小学生の時から「なぜそうなるのかを考える」数学的活動を行う**ことが重要だと考え、算数の勉強が始まる 1 年生の子どもたちに対してどんな手立てを打てばよいのかを考えた。

そこで、①**全員が授業に参加できる土台づくり**をした上で、②課題を追究していく**単位時間の指導・援助の工夫**③**仲間とともに考え「高め合う」場の工夫**を行えば、「なぜそうなるのか」を考え、仲間とともに「高め合う」ことが楽しい算数科学習ができると考えた。そこで、第 1 学年の「3つのかずのけいさん」（9月）と「ひきざん」（11月）で実践を行った。

＜食育＞ 食の楽しさを味わい自ら判断し実践する力を育む食育の推進
—つながりのある効果的な食に関する指導の充実を目指して—

多治見市立北栄小学校 渡邊 紀子

近年、社会環境の変化や食生活を取り巻く環境の変化に伴い、食に関する問題は多様化している。飽食の時代となり、食事を自由に選択できる一方で、食生活の乱れ等に起因する肥満や痩身、生活習慣病は増大し、食習慣を見直すことが重要な課題である。望ましい食習慣を身に付けるためには、子どもの頃の食生活が重要となる。しかし、核家族化や共働き世帯の増加など、家庭での食事の在り方も変化し、家庭で十分な食教育を行うことが困難な現状があり、学校における食に関する指導が重要となっている。本校においても、給食の残菜の量は減少してきているものの、朝食の欠食率は依然としてゼロにならず、朝食内容も主食のみの児童がいるなど、望ましい食生活への意識の低さがある。

そこで、行事や教科等と**つながり**をもたせた食に関する指導を計画することで、指導内容が深まり、児童の正しい**知識の定着**や**望ましい食習慣への意識**を高め、**実践力**につながるのではないかと考え、本研究実践に取り組むこととした。

＜音楽科＞ 自分の「思いや意図」をもって表現を工夫する子の育成

～表現と鑑賞の往還の中で、学習のつながりを実感し必要感をもって学ぶ音楽科学習の在り方～

多治見市立滝呂小学校 江崎 紀子

本研究は、**表現と鑑賞の往還**の中で児童が**学習のつながり**を実感し**必要感**をもって学ぶことによって、**自分の「思いや意図」**をもって**表現を工夫**していく音楽科学習の在り方を追究し実践した記録である。表現に苦手意識をもつ児童がいる実態と、自己表現の意欲が高まり仲間と協力して工夫する活動を好む中学年の特性を踏まえ、もっと児童主体で学びが生まれ**表現を工夫**する姿を目指したいと願った。「音楽の学習をすれば、ふだんの**生活や社会**に出て役立つ」という質問に対し「そう思う」と答えた児童が全国で47.7%、学級児童でも60.7%と低いことから、音楽科の学習で培われる音楽の力（＝目に見えないものを感じ捉える力）がどんなことに役に立つのか、自分の**生活や社会**につながっていないことに原因があると思われる。**自分の「思いや意図」**を明確にするためには、学ぶ**必要感**と様々な**学習のつながり**の実感が有効である。仲間と共に表現を工夫する楽しさを実感し、**自分の「思いや意図」**をもって表現する喜びを感じながら、音楽でこそ培われる力音楽の力を**生活や社会**に役立てていこうとする姿に着目し、本研究をまとめた。

＜数学科＞ 学び合う喜びを実感できる数学科の授業改善

～仲間との関わりの中で、主体的に活動しながら、学びに向かう人間性を育成する学び合いの想像～

多治見市立小泉中学校 柴田 康博

11年目にして初めて中学校に勤務し1年生を担当することになった。生徒は、最初の3か月間は学ぶ意欲に満ち溢れていた。しかし、学習内容が難しくなるにつれて机に伏せるなど、徐々に授業に集中できない生徒が出てきた。このような現状を打破すべく、楽しいと感じるような授業を目指し、指導方法を1から見直すことにした。授業を改善するにあたって、新学習指導要領の「主体的・対話的な深い学び」の「どのように学ぶのか」を大切に考えた考え方を参考にした。そして、仲間と関わりながら生徒が主体的に活動することで、学び合う喜びを実感できるような授業を目指し、次の5点について実践した。一つ目は、「**時間を確保するための授業展開の工夫**」。二つ目は、「**仲間と学ぶことの必然性を意識させる工夫**」。三つ目は、「**課題を明確にし、到達目標を意識させるための工夫**」。四つ目は、「**個人追究の仕方の工夫**」。五つ目は、「**自己評価カードの工夫**」である。本論文は、2年間の実践を重ね、その成果と課題をまとめたものである。

<学力向上>

生徒一人一人の学力向上を目指して
～教師の授業力向上と生徒の学習習慣の改善を通して～

多治見市立南姫中学校 松浦 一信

昨年度に実施した岐阜県学力状況調査の結果から、本校生徒の学力は十分に身に付いていない状況にあることが分かった。さらに、基礎的・基本的な知識及び技能の定着が十分でないために、それらを活用して考え、判断したり表現したりする力が育まれていないことも分かった。そして、教師や生徒を対象にしたアンケート調査より、教師の指導の在り方並びに生徒の学習習慣に起因していることが明らかになった。

このことから、授業力向上に向け、**学習内容を体系化させながら、考えを広げ深められるような指導へと改善**を図るとともに、**家庭学習を充実させる取組**を行ったり、**学び直しの機会**を設けたりして**生徒の学習習慣の改善**を図れば、**生徒一人一人の学力を高める**ことができると考えた。

そこで、研究主題を「**生徒一人一人の学力向上を目指して～教師の授業力向上と生徒の学習習慣の改善を通して～**」とし、実践を進めることとした。

<算数科>

論理的に思考する楽しさが実感できる算数科学習の創造
～「高め合う子」を視点とした授業改善を通して～

多治見市立精華小学校 小野木 学

論理的に思考する力は、他者との関わりの中で身に付くものだと考えている。それは、その思考が「相手に分かりやすく説明する」手段になるからである。このように考えたときに、論理的に思考する力は、「**相手に分かってもらえるように説明することができた**」という喜びとともに学習できるはずである。本校の研究主題は「高め合う子」である。その研究内容2「よりよく伝える指導」を中心として実践した。本校の研究は、算数科の一授業で考えたとき、論理的な思考の力を付けることができるものであるととらえている。本研究は、本校の研究を土台として**論理的に思考する楽しさを実感できる学習**づくりを目指していきたいと考え構想したものである。

<研究内容1> 考えをもつための指導。

<研究内容2> よりよく関わり合う中で論理的な思考を高める指導。

<研究内容3> 高まりを実感するための指導。

【優良賞】

<全領域>

いきいきと話をする子

～話をしたい気持ちと口腔機能を育てる～

多治見市立精華小学校附属愛児幼稚園 古田 博子

自分の意見を言うことや、人の話を聞くことはコミュニケーションの基本である。幼児期において、自分の話が相手に伝わったという満足感が十分に感じられると、相手の話にも耳を傾けられるようになると言われている。

本学級の幼児は、話はできても発音が不明瞭な子、自分の気持ちを言葉で表現できない子が多く、友達に手を出してしまったり、思いを理解されず気持ちが崩れたりすることがあった。そのため、**子ども達がいきいきと話ができるようになるためにはどのような方法があるのか**を考えたい。

「話したい」「伝えたい」と思うような感動体験やじっくりと話をする場を設けると、相手に伝えたい、共感してほしいという気持ちが湧き、言葉で伝えようとする姿が見られる。そんな体験を積み重ねて、**話す意欲**につなげたい。また、十分に思いを話すことで**相手の話にも興味をもって耳を傾けられる**ようになってほしいと願う。

図書館教育賞の 審査結果

平成 29 年度東濃地区学校図書館教育賞の審査結果をお知らせします。

【優秀賞】北栄小学校

「本でつながる(仲間・学び・保護者・地域・先生・本)」を図書館教育の目標とし、継続的に読書好きな子を育てています。児童アンケートの結果や読書冊数の推移からも成果がみられます。

学校全体で取り組まれていることや、地域・保護者との積極的なつながり等により、効果的な図書館経営がなされていることを評価していただきました。



遠くの学校とも
つながる読書郵便



学びとつながる
児童作品

【奨励賞】滝呂小学校

図書館の指導目標を「読書の楽しさを知り、進んで読んだり、調べたりする子」とし、継続的に取り組んでいます。

本年度は、豊かな読書習慣の確立や、学習・情報センターとしての機能の充実をはかっています。読書好きな子が育っていることや、パソコン教室と連動した調べ学習をしていることなどを評価していただきました。



図書を活用した
学習の足跡



地域(多治見)を身近
に感じるコーナー

「ひびきあいの日」 表彰校の紹介

今年度も各学校から「ひびきあいの日」の実践を報告していただきました。どの学校も、子どもたちの関わりを大切にしたい心に響く実践をされました。その中で優れた実践をされた学校に対して「ひびきあい賞」が贈られました。受賞校とその実践について紹介します。

○受賞校の実践について

【明和幼稚園】

年2回の特別老人福祉施設の訪問に向け、お年寄りに喜んでもらえるプレゼントづくりや歌の練習等を位置付け、人の役に立つ喜びを味わえるよう工夫して取り組まれました。

【精華愛児幼稚園】

主任児童委員や人権ワークショップグループと連携し、園児にも保護者にも人権について考える機会を設け、周りの人を大切にするということについて考えられました。

【市之倉小学校】

異学年集団での遊び等多くの仲間の良さを見つける取組、「ひびきあい集会」を核として言葉や行動を見つめ直す取組を通じ、思いやりの心や正しい判断力を高められました。

【滝呂小学校】

毎月の命の教育、委員会活動による福祉施設への寄付、ひびきあいの日への授業参観、各家庭での人権標語作成等を通じ、家庭と連携して継続的に人権感覚を高められました。

【北栄小学校】

ハイタッチ挨拶運動、異学年とのふれあい活動、家族と作るハピポカ標語、ひびきあいの日への授業参観等を通じ、家庭や地域と連携して、思いやりの心を育まれました。

【南姫中学校】

南姫人権宣言に基づき、人権集会、合唱、たじみ子ども権利の日に関する授業、仲間の良さ見つけ等に継続的に取り組み、お互いを認め、尊重し合う意識を高められました。

【笠原中学校】

年間を通じた「はあとふる活動」、人権集会、LGBT についての講演会及び保健体育の授業等を通して、相手の個性を認め、差別をなくそうとする意識を高められました。